

平成 30 年度

き し はなかけやまこふん  
岐志花掛山古墳現地説明会資料



岐志花掛山古墳上空からの風景（西側唐津方面を望む）

日時

平成 30 年 9 月 2 日（日）10：00～

場所

糸島市志摩岐志 624-2 他（花掛山山頂）

糸島市教育委員会

## 1. はじめに

この古墳の発掘調査は、県道福岡志摩前原線の工事に伴い実施しています。

この古墳は墳丘の大部分が失われており、石室の上部も破壊されていたことから長い間、知られていませんでした。昨年度、道路工事の準備として、花掛山の樹木が伐採された後に市教育委員会が試掘調査を実施したところ、石室の石組みを発見しました。新発見となったこの古墳は地名と山の名前を組み合わせ「岐志<sup>きし</sup>花掛<sup>はなかけ</sup>山古墳<sup>やま</sup>」と呼称することとなりました。

今回の現地説明会では、この古墳の石室と出土した遺物を公開し、調査成果について解説します。

## 2. 古墳の立地

岐志花掛山古墳は標高 39m (国土地理院のデータ) の花掛山の頂上に築かれています。古墳時代には現在の岐志漁港から北側の芥屋方面に向かって遠浅の内海が入り込んでいたと考えられ、花掛山の西側山麓は内海と引津湾を繋ぐ水道になっていたようです(p.5)。また、古墳上からは眼下に引津湾を一望でき、遠くには唐津湾に浮かぶ高島とその奥に東松浦半島、北に目を転じると玄界灘に浮かぶ小呂島まで望むことができます。このように岐志花掛山古墳は海に面した立地に加え、海上の遥か遠方まで望むことのできる海と関係の深い場所にあるといえます。

周辺の古墳としては北東約 250m の丘陵上から麓にかけて 4 基の円墳で構成された古野古墳群があり、西側約 700m の丘陵麓には 2 基の円墳で構成された岩野古墳群があります。

## 3. 古墳の構造

- ・古墳の形態 円墳（方墳？）
- ・古墳の規模 直径約 12～16m（推定）
- ・主体部の形態 横穴式石室
- ・主体部の平面規模 【玄室】 長さ約 2.1m、幅約 1.6m  
【羨道】 長さ約 1.0m、幅約 0.5～0.6m
- ・古墳の時期 6 世紀中葉（7 世紀前半まで追葬）

岐志花掛山古墳は大きく削平されているため形態や規模ははっきりしませんが、墳裾と推定される部分から復元した結果、直径約 12～16m の円墳あるいは 1 辺約 12m 四方の方墳であったと考えられます (p.6)。

古墳の中央部には横穴式石室の最下段の石組みが残っていました。平面規模は玄室が長さ約 2.1m、幅約 1.6m、羨道部が長さ約 1.0m、幅約 0.5～0.6m です。床面には石敷きがありますが、場所によっては上下 2 面に重なって敷かれている部分があることが観察でき、追葬時に石を敷き直した可能性があると考えられます。

石室に使われている石材は花崗岩で、床面の敷石も大部分は花崗岩です。花掛山の山頂から東側斜面にかけては花崗岩の岩盤が露出しており、転石もあることから古墳の築造時にはこれらを利用したものと考えられます。ただ、敷石の一部には片岩系の石材が混じっており、これは他の場所から運び込まれた可能性があり、何らかの意図があることが推察されます。

敷石の上部からは金銅製の耳環、鉄製の鍬や刀子、須恵器、土師器等の副葬品が出土しています。このうち、須恵器、土師器の大部分は石室の袖部の左右に分けられ纏まった状態で発見されました。大まかに分けると北側の袖部 (p.7 ②) は 6 世紀中葉～後半の須恵器類が多く、(p.7 ④) は 7 世紀前半までの須恵器類が中心を占めています。このことから、初葬時に収められた遺物は、追葬時に玄門に寄せ集められ (②)、新たに奥壁の屍床付近に副葬品が納められたものと考えられます。

羨道部の入口付近には板状の石が立てられており、この外側には大型の花崗岩の礫が詰められています。これらは石室への立ち入りを防ぐための閉塞石と考えられます。

#### 4. おわりに

今回の説明会で公開した岐志花掛山古墳は大きく削られ、当時の姿もほとんど残っていませんでした。

しかしながら辛うじて残されていた石室内からは奇跡的に須恵器などの土器類が数多く出土しており、この位置関係から古墳時代の葬送のようすを知ることができるなど、貴重な発見となりました。また、石室の閉塞方法なども重要な事例となるといえます。

この古墳の被葬者がどのような人物であったのかは今後明らかにしていく必要がある

と思いますが、「2.古墳の立地」でふれたように、海との関係から探っていくのも一つの方法であると考えられます。唐津湾から玄界灘の遥か遠方まで広く望める位置にある本古墳の被葬者は、海上の交通や交易に勢力を有した豪族であったと推察されます。

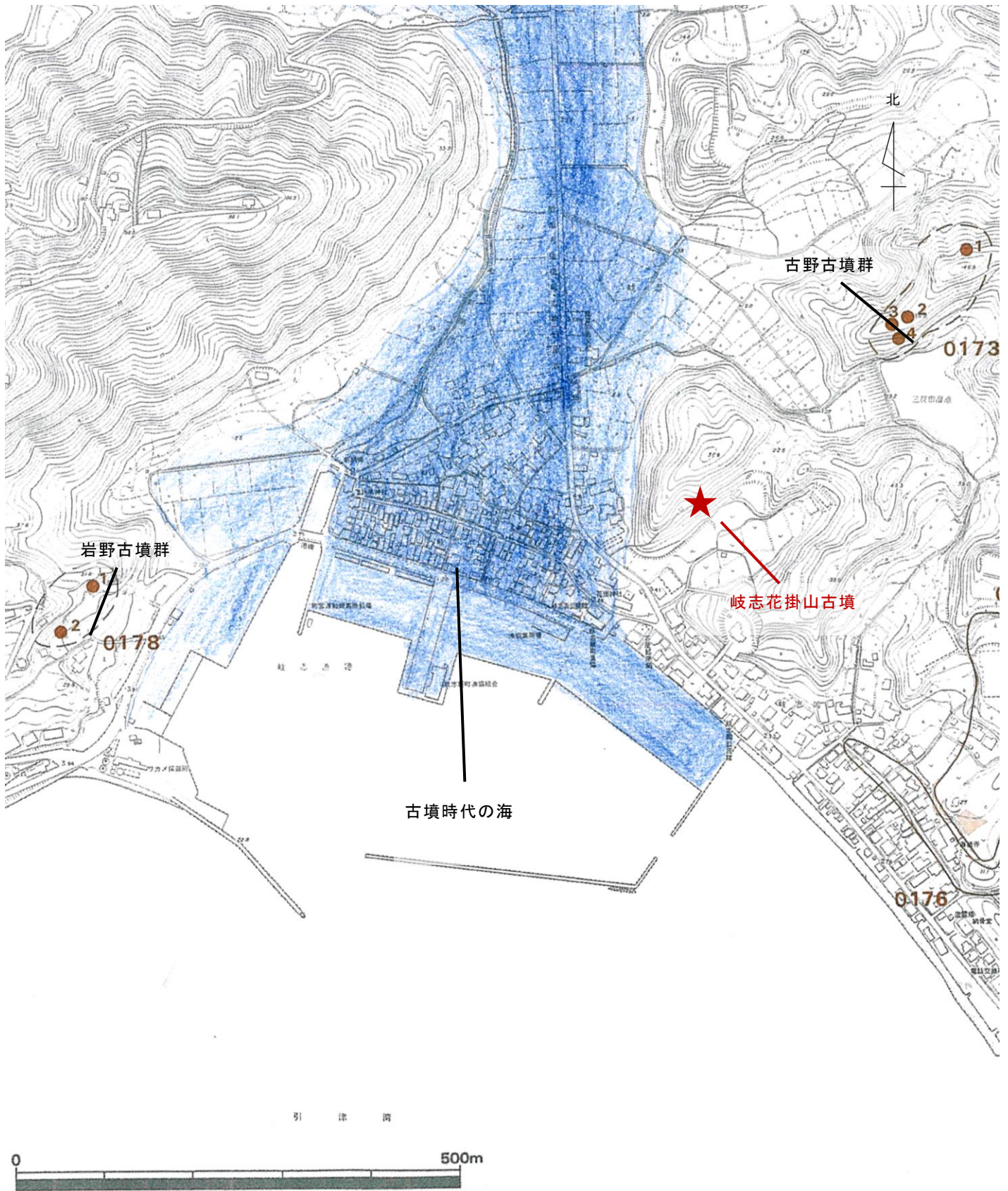
今回調査を行った志摩地域の西側部分は、近年にはあまり古墳の調査が行われてこなかった地域です。本古墳の調査によって、周辺の歴史が少しずつ明らかになっていくことと思います。

#### 【花掛山の名前の由来】

昭和 2 年刊行の『糸島郡誌』には花掛山の由来について「(神功皇后が乗った) 鳳船小富士村岐志の近海を通過の時側なる山に花を掛け住吉大明神を祭り給う。依て其所を花掛山と云ふ。後に住吉の御社を立て花掛大明神といふ」と記しており、神功皇后がこの山に立ち寄り花を掛けたという伝承が名前の由来となったことがわかります。

(「 」内は糸島郡教育会編『糸島郡誌』(1927年)から引用。( )内は筆者が加筆)

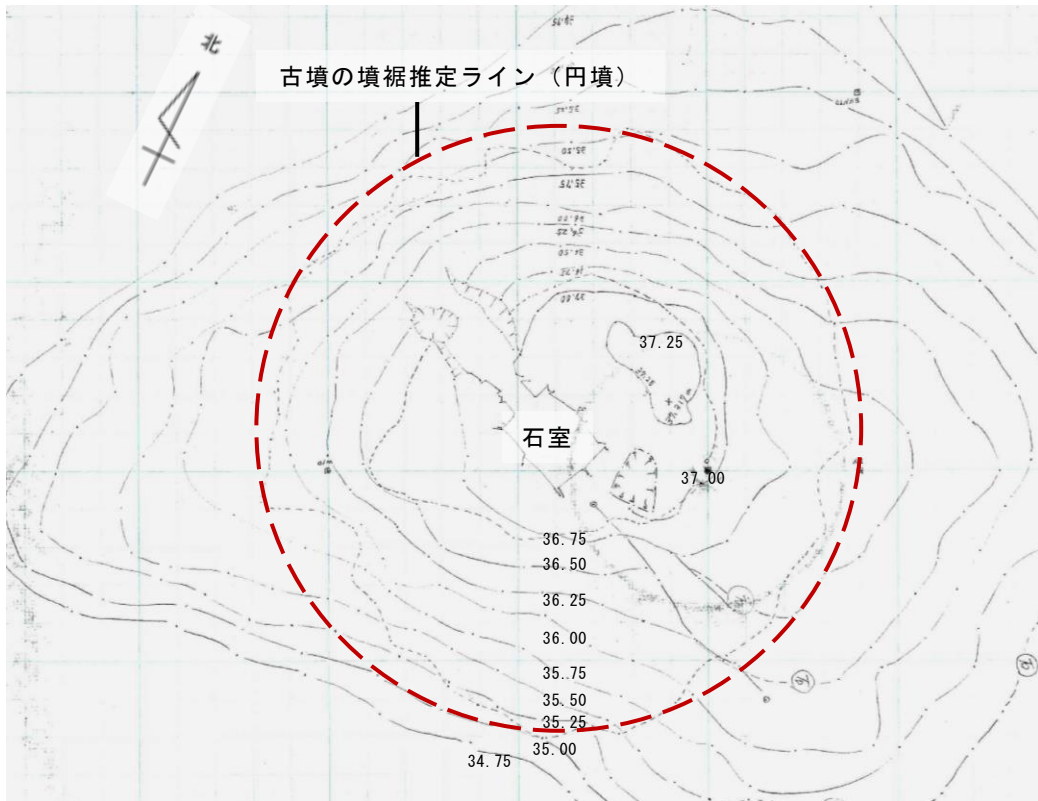




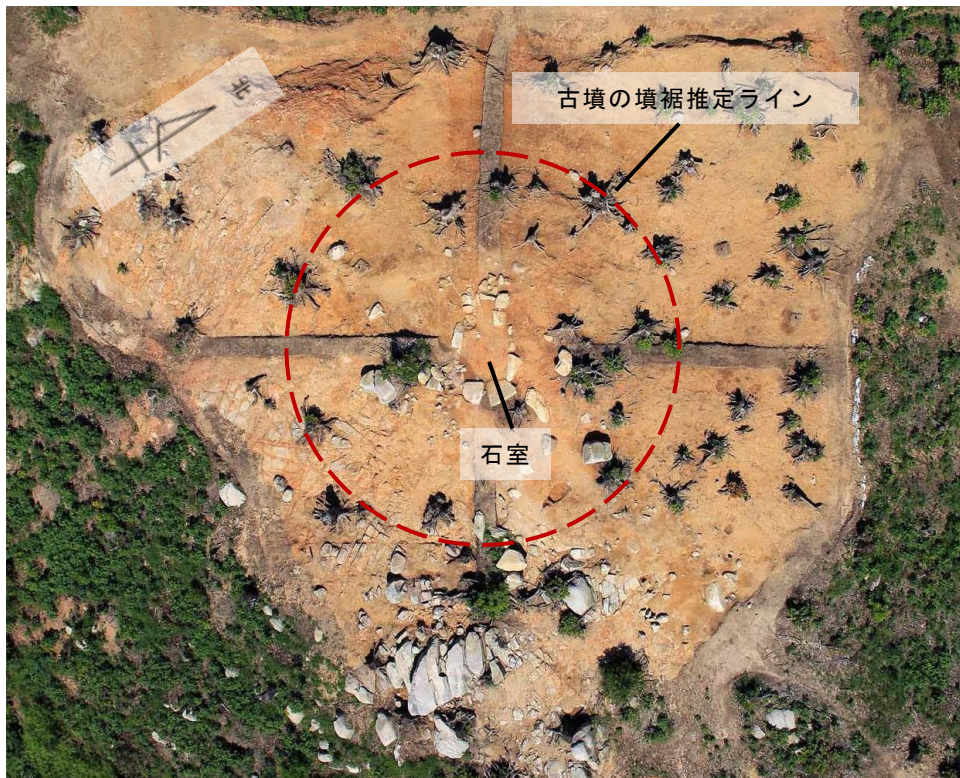
岐志花掛山古墳と周辺の古墳 (1/6000)

(古墳時代の海岸線は『新修 志摩町史』(志摩町、2009年) P175 図3を参考にした推定ライン)





岐志花掛山古墳の墳丘測量図 (1/200)



上空から見た岐志花掛山古墳





岐志花掛山古墳石室内遺物出土状況





① 金銅製の耳環



② 供献された土器群

(左上から右下に向かって順に：鉢(土師器)、脚台付長頸壺、平瓶、平瓶、提瓶、坏蓋(以上須恵器))





③ 供献された土器

(須恵器の坏身つきみの下に坏蓋が重なっている)



④ 供献された土器

(右上の2点：脚台部の破片、提瓶、その他：坏の蓋または身（いずれも須恵器）)





⑤ 鉄製の鍬<sup>やじり</sup>



⑥ 石室の閉塞石<sup>へいそくせき</sup>

(羨門側から奥壁方向を見た状況、羨道内に板石を立てた後、花崗岩の礫を詰め入口を閉鎖している)